発　行
新大工町自治会
令和元年８月

新大工町自治会だより

[redacted]

[redacted]

７月２７日（土）の「第３７回 ふれあい広場 伊良林校区まつり」。多くの人で賑わいました。新大工町自治会も子ども会や十八銀行新大工町支店の協力で、「アイスもなか」や「ヨーヨー釣り」を出店し、盛り上げました。

踊町の「場所踏み」支援

新大工町、馬町、大黒町、筑後町、玉園町、上町、八幡町の有志で構成する**「玉麓会（たもとかい）」**では、踊町の諏訪神社での場所踏みをサポートします。内容は、道中の交通整理や踊馬場の清掃など。

ご協力頂ける方は、下記日程の開始予定１５分前までに新大工町安全・安心交流センターにお集まり下さい。

※「場所踏み」…くんち奉納踊り本番に向けた稽古を、踊場場や奉納場所で行うこと。

諏訪神社の「場所踏み」支援日程

（新大工町の担当日）

- 8/ 1（木）　18：00～19：30　今博多町
- 8/ 8（木）　18：00～19：30　今博多町
- 8/26（月）　19：00～21：00　江戸町
- 8/29（木）　19：00～21：00　魚の町
- 9/ 5（木）　18：00～19：30　今博多町
- 9/ 8（日）　 8：00～ 9：30　籠町
- 9/ 8（日）　10：00～12：00　神輿
- 9/ 8（日）　13：00～14：30　江戸町
- 9/ 8（日）　15：00～16：30　魚の町
- 9/11（水）　19：00～21：00　江戸町

※馬町と合同で行います

歩道橋撤去工事途中の光景。
玉屋の外壁にも足場が組まれ、解体工事が始まりました。

編集後記　～ぶらりばなし　こぼればなし～

今回の特集記事「昔ばなし ぶらりばなし」では、昭和２０～３０年代の子ども時代を振り返りました。戦後まもなくで物の少ない時代に、子ども達が生き生きと日々を過ごした様子が浮かびます。以下は、記事編集後の広報担当者らによる「こぼればなし」です。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―

― 主に子ども時代を過ごされたのは？ ―

（康） ２０年代初期かな。

（敏） 私もその時期だね。

（修） 僕は３０年代半ばですね。

― やはり、物の無い時代だった？ ―

（康） そりゃぁそうさ。原爆投下直後の焼け野原やけんね。ヤミ米もまだ、そんなに出回っとらんで、イワシと芋ばっかりやったよ。

（敏） 『ひもじい』時代でね。小学校の校庭で、被災した人達が、平釜で炊いた雑炊を分け合いよった。イワシと芋はご馳走よ。

（修） そういえば長崎は昔、イワシのものすごう沢山取れよったってね。漁船で持ち帰る時にその重みで船の沈没したりしたってよ（笑）。

（敏） すごいね。

（修） 芋ば輪切りにして干したとば「こっぱ」って言いよったたい。ゆがいたら旨かとけど、生で食べたらまずかったよね。

（康） そいば、僕達は食べよったよ。一旦腹の膨れても、学校に行く途中でお腹のすいてね。

（敏） あれは硬うして！焼いて食べよったよ。生は軟らかくなるまで噛んだら、味のせんごとなって、旨うなかった。

― 白米は貴重品だった？ ―

（修） 真っ白のご飯はご馳走やったね。

（康） 黄色かご飯ば見て、田舎の人が「長崎人は贅沢か。卵ご飯ば食べよる。」って。そいは粟ご飯やかね。何が旨かもんねって。

（修） 一家庭に一冊、米穀通帳のあったたい。そいば持って行かんば、米の買えんでさ。まだ配給制の頃よね。

― 卵ご飯は贅沢？ ―

（修） 卵１個が１２円位やったかな。高かけん滅多に食べられんやったよ。

（康） 病院にお見舞いに行く時は、よう、卵ば持って行きよった。

（修） 病気したら卵ば１個食べられたもんね。卵の２個分に増える粉のあったろう？

（康・敏） あった、あった。買いよった。

（修） 「卵の素」っていうたかな。卵ば割ってその粉と水ば入れて増やすとさ。ようかき混ぜたら、２倍になったごと見えたよね。

― 貧しくても楽しかった？ ―

（康） あん頃は「一億総貧乏人時代」っていうか、みんな貧しかったけん、「子どもの貧困」なんて言葉はなかった。学校に行く時も、靴なんか無くてワラ草履ば履いて行きよったよ。帰りは裏側の擦れて、ワラの抜けていくとさ。でも、それが普通やったもん。

（敏） そうね。雨の日は、学校にはハダシで。傘も無かし、雨の切れ目を待って走ったし。大雨の時は自主的に休校さ。

（康） 物やお金が無くても、何かしら希望があったっていうか。皆が同じ状況やけん、何も引け目ば感じることの無かった。皆一緒に、貧乏が当たり前の時代やった。

（修） 皆で知恵ば出し合って工夫して、何でもなか事ば面白うしよったもん。今思えばなんか、輝いとったよね。

（敏） そうだね。「手を取り合って、助け合って」。そんな時代の子ども達が、戦後の日本を支えてきたに違いなかよね。

《おわり》

米穀通帳

新大工町 ～昔ばなし ぶらりばなし～

お題「昭和２０～３０年代の子ども達」

まちの方々に、懐かしい子ども時代の想い出をお聞きしました。

子どもの頃の遊び

・かごめかごめ
・けんけんぱ
・おしくらまんじゅう
・馬のり
・ゴム跳び
・日月ボール（けん玉）
・フラフープ
・ビー玉
・カード遊び　・缶蹴り
・コマ回し　・チャンバラ
・ハタ揚げ　・ままごと

（写真：光源寺提供）

紙芝居

自転車の荷台に引き出し付きの机と、その上に紙芝居。山のように群がる子ども達。あの頃、まちのあちこちで見られた光景。
新大工町付近では、大手橋付近や桜馬場天満宮あたりに来ることが多かった。ちょっとした階段が観客席として使われた。

菓子・パン屋

現在の平井餅まんじゅう店の場所にあった「達田豆店」で、黒い大粒の豆を甘く煮たのが売られていた。店のおじさんが、肩にかけた小さな竪琴を奏でながら、あちこちを行商に廻っていた。

そのお隣は「庄司パン屋」。注文すると陳列ケースから取り出してくれた。

今の宝会館の脇の出入口付近に駄菓子屋があって、子ども達がよく入りびたっていた。

ロバのパン

屋根付きのリヤカーにマスザキのパンが何種類か並んでいた。ロバが引いていたので「ロバのパン」と呼んでいた。「お馬の親子は仲良しこよし♪」の歌が流れていた。

飴細工

昔はおくんちの露店といえばこれ。握りバサミ一つで、次々に動物の形にして竹串に刺して並べる。手で「きゅっきゅっ」と飴をしごき、耳の部分をピンと立て、赤や青の色を付けて、あっという間に仕上げる、その見事な手さばきに、大人も子どもも思わずうっとり。

昔の飴細工を描いた絵

肥児丸（ひにがん）

※　疳虫下し（かんむしくだし）の薬

背中に破れ番傘を差し込み、三味線を弾きながら町を売り歩く、独特な風貌の「肥児丸（ひにがん）」の宣伝人、伊藤辰二郎さん。「プーしてみろ」。おならすると３個イモ飴が貰えるというので子ども達は夢中で付いて回った。

「あー！こん人、見たことある！」
鍵屋薬局本店（八幡町）の店頭に飾られた、伊藤さんの写真や衣装（本物！）を見て、歓声をあげる人もいる。
遠くは神ノ島や脇岬方面までも、歩いて廻っていたというからスゴイ！

飴せん

割り箸に「くるくるっ」と水飴を巻きつけて、２枚のエビせんべいではさんだもの。
これを買うと、紙芝居を前の方で見ることができた。

べっこう飴

おじちゃんが、屋根のついたリヤカーを引いて、べっこう飴を売りに来ていた。
５円玉を渡すと、ルーレットのような箱にパチンと入れてクルクル回し、どこで止まるかで飴の大きさが違った。
東京、大阪、福岡などと書いてあったが東京に当たると一番大きな飴がもらえた。

氷菓子（バクダンアイス）

ゴム製の容器に味の付いた氷が入っていた。
チューチュー吸うと、ほのかに甘い。
食べ終わってフニャフニャになった容器に水を入れて投げ合ったのも、懐かしい思い出。

子ども会で日本放送（NHK）を見学した時の集合写真

中通りで
よく見かけた
東洋軒のパン

アルミ鍋を持って「おつかい」に

今のシーボルタウンの脇付近に豆腐屋があった。アルミ鍋を持って豆腐を買いに行くのが、あの頃の子ども達の定番のおつかいだった。
また、ボールを持って天満市場の裏通りのかき氷屋さんに行くこともあった。
「おばちゃん、３杯分ね」と言えば、ガリガリ削って山盛りにしてくれた。
家に持って帰り、砂糖をふりかけて家族で食べた。

ところてん

おばあさんが、たる桶に氷を張ってところてんを売りに来ていた。
目の前で突き出して、直接、器についでくれた。しょうがとネギをのせて、チュルっと食べるのが、むしょうにうまかった。